

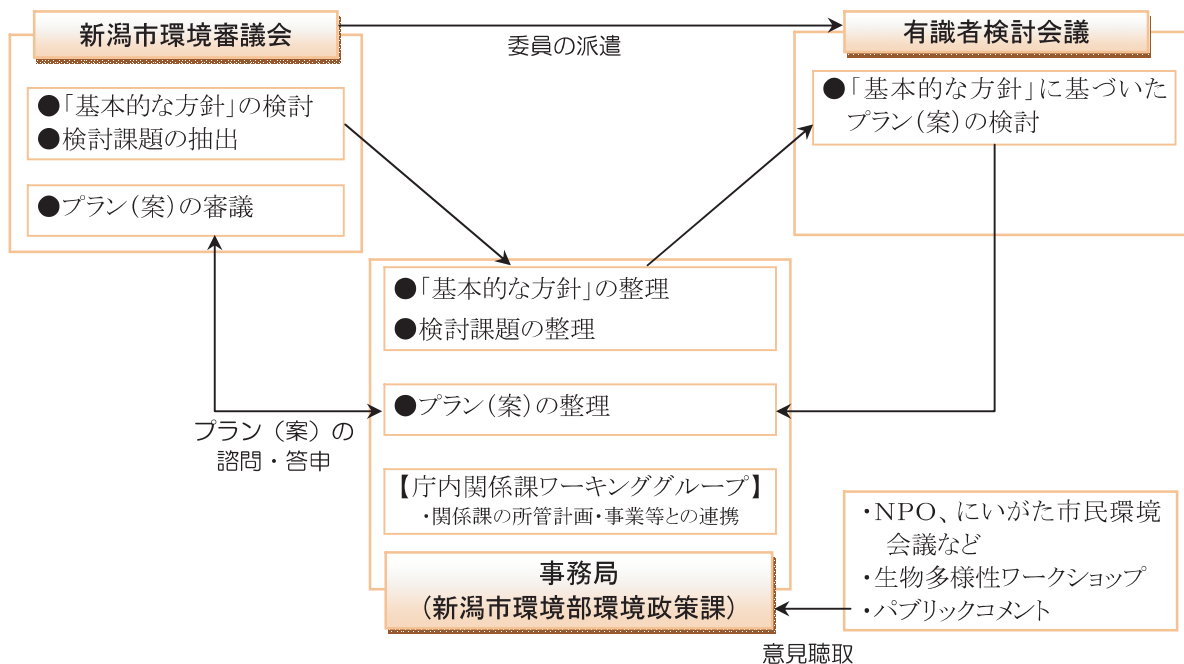
資料編

資料 1	プラン策定経過	……………資料- 1
資料 2	生物多様性ワークショップ検討結果（概要）	……………資料-11
資料 3	生物多様性に関する市民意識調査結果（概要）	……………資料-17
資料 4	生物多様性保全に関する世界や日本国内の動き	……………資料-33
資料 5	数値目標一覧	……………資料-35
資料 6	写真出典一覧	……………資料-37
資料 7	用語解説	……………資料-38

資料1 プラン策定経過

1 プランの策定体制

「にいがた命のつながりプラン」の策定にあたっては、新潟市環境審議会において、本プランの基本的な方針を審議しました。その基本的な方針をもとに、有識者検討会議で詳細な内容を検討し素案を取りまとめ、その内容を新潟市環境審議会で審議しました。プランの策定体制を以下に示します。



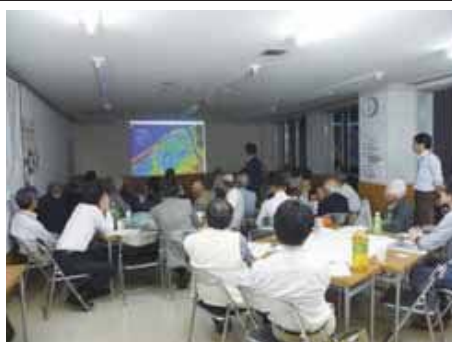
2 プランの策定経過

【プランの策定経過（平成22年度 1/2）】

年月日	会議名など	主な内容
平成 22 年度	8月2日	庁内関係課ワーキンググループ会議 ・(仮称)新潟市生物多様性地域計画の策定について ・各課所管の計画・事業で関連する事項について(調査依頼) ・意見交換
	9月28日	第1回生物多様性ワークショップ ・ガイダンス ・生物多様性ミニ講義「湖沼の植物種多様性を保全するために必要な生態学的な視点」(新潟大学副学長 紙谷 智彦氏) ・意見交換

【プランの策定経過（平成22年度 2/2）】

年月日	会議名など	主な内容
平成 22 年 度	11月9日	第2回生物多様性ワークショップ <ul style="list-style-type: none"> ・生物多様性ミニ講義「里山と海岸林を考えるために」(新潟大学副学長 紙谷 智彦氏)、「秋葉山の植物についての研究報告」(元新潟大学理学部教授、新津植物資料室 石澤 進氏) ・市内の湖沼及び里山における生物多様性の保全及び持続可能な利用についての課題の抽出(5班編成) ・各班発表
	11月30日	第3回生物多様性ワークショップ <ul style="list-style-type: none"> ・課題の解決案の検討 ・各班発表
	2月1日	第1回新潟市環境審議会 <ul style="list-style-type: none"> ・(仮称)新潟市生物多様性地域計画の策定について
	3月11日	新潟市環境審議会関係者会議 <ul style="list-style-type: none"> ・新潟市における生物多様性について ・(仮称)新潟市生物多様性地域計画の基本的な方針(案)について
	3月30日	にいがた市民環境会議三部会合同会議 <ul style="list-style-type: none"> ・(仮称)新潟市生物多様性地域計画の策定に向けた意見交換



平成22年度 第1回生物多様性ワークショップ



平成22年度 第2回生物多様性ワークショップ

【プランの策定経過（平成23年度 1/3）】

年月日	会議名など	主な内容
平成 23 年 度	4月14日	第1回新潟市環境審議会(諮問) <ul style="list-style-type: none"> ・(仮称)新潟市生物多様性地域計画の基本的な方針(案)について ・(仮称)新潟市生物多様性地域計画(案)の諮問について
	6月2日	第1回有識者検討会議 <ul style="list-style-type: none"> ・(仮称)新潟市生物多様性地域計画(案)について ・生物多様性に関する考え方について ・新潟市環境審議会、にいがた市民環境会議からの指摘に基づく確認事項について ・基本的な原則等について

【プランの策定経過（平成23年度 2/3）】

年月日	会議名など	主な内容
平成23年度 6月30日	第2回有識者検討会議	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な原則「生物多様性の恵みと人との適切な関わり」のあり方について ・目指すべき将来像（短期・長期目標）について ・具体的な施策、シンボルプロジェクトについて
7月15日	第1回生物多様性ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟市の生物多様性の短期と長期の将来像に関する討議（5班編成）
8月2日	第2回生物多様性ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> ・50年後の担い手となる子どもたちにも分かりやすい将来像の討議（5班編成） ・全体討議
8月5日	第3回有識者検討会議	<ul style="list-style-type: none"> ・目指すべき将来像（短期・長期目標）について ・具体的な施策、シンボルプロジェクトについて
8月31日	第4回有識者検討会議	<ul style="list-style-type: none"> ・目指すべき将来像（短期・長期目標）について ・具体的な施策、シンボルプロジェクトについて ・生物多様性の重要性、新潟市における生物多様性の危機について



平成23年度 第1回新潟市環境審議会（諮問）



平成23年度 第1回生物多様性ワークショップ



平成23年度 第2回生物多様性ワークショップ



平成23年度 第2回生物多様性ワークショップ

【生物多様性の保全と持続可能な利用のための課題と解決策の提案（里山2／2）】

項目	課題	解決提案		
		理念・方針のキーワード	施策・取組みなど	主体の役割
全体	◆人材の確保		●高齢者のマンパワー活用 ●指導者の育成	
里山（海岸松林）	◆マツ以外での飛砂防止	●多様な樹種の林 ●浜植物の保全復元	●ニセアカシアを許容する市民合意	
	◆	●学校の取組み	●継続的なカリキュラム	
里山（スギ人工林）	◆伐採施工方法		●整備・開発のガイドライン	
	◆林業者への支援		●資金的支援 ●冬期間の支援 ●6次産業化	
	◆体制づくり		●間伐の公共事業化	
	◆間伐材・国産材の利用促進		●薪炭、クラフト	
里山（ナラ等の雑木林）	◆伐採跡地の再生	●里山管理のゾーニング ●体制とルールづくり	●下刈り方法の改善 ●ボランティアグループ・保全協議会の組織化	
	◆観光道路造成		●整備・開発のガイドライン	
身近な森（河畔林や公園の森等）		●レッドデータブックの活用	●子ども向け解説本 ●環境学習の推進	
	◆行政が伝える努力			行政 ●所有者、市民に保全の理解を得る取組み
計画策定		●50年前の里山維持管理の実態把握 ●実現可能な管理方法・対象地の選定 ●保護対象動植物の選定 ●具体的取組みの実態例把握 ●明確な目標、行動計画、優先順位	●雑木林の「雑」という言葉は良くない→「落葉広葉有用林」	

2 平成23年度

【生物多様性保全の短期目標と長期の将来像（1/2）】

項目	短期の目標（10年後）			長期の将来像（50年後）		
	保全	活用	仕組み	保全	活用	仕組み
里潟	<ul style="list-style-type: none"> ● 現状より悪くならないよう保全 ● 湖岸・湖岸林の保全 ● 鳥屋野潟・福島潟のラムサール登録 ● 潟と田んぼが一体となったラムサール登録 	<ul style="list-style-type: none"> ● 親水機能の向上 ● 鳥屋野潟への一極集中排水から多様な排水へ ● 鳥屋野潟の水質改善・緑化推進 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現状や保全活動の評価分析 ● 経済性だけではない地元にもメリットがある仕組みづくり ● 地域・公共・団体との協働 ● 地域の人々が自慢できる潟 	<ul style="list-style-type: none"> ● 田んぼも含む平野全体をラムサール登録 ● 原植生・原風景の保全・復活 ● 2万羽の白鳥 ● 潟中の田んぼ（佐潟） ● 鳥屋野潟の水質浄化と潟内に林 		
河川	<ul style="list-style-type: none"> ● 開発制限 ● 生物豊かな河川 ● 水質改善 		<ul style="list-style-type: none"> ● 議論の場を設ける 	<ul style="list-style-type: none"> ● 河畔林があり本来の植物がある川 ● ホタルのいる川 	<ul style="list-style-type: none"> ● 遊べる川 	
田園	<ul style="list-style-type: none"> ● 農薬・除草剤の低減 ● 冬みず田んぼを増やす ● ヘイケボタルがいる田んぼ 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習の場として活用 	<ul style="list-style-type: none"> ● 農業政策と連携した方向性を出す 	<ul style="list-style-type: none"> ● 土水路 ● 農薬を使わない田んぼ ● トンボやカエルがいる田んぼ 		
里山	<ul style="list-style-type: none"> ● カブトムシがいる里山 ● ゴミのない里山 ● 里山保全・活用の活動を継続 	<ul style="list-style-type: none"> ● 計画的間伐による整備林の創出 ● エネルギー利用（バイオマス）で維持 ● 体験学習の強化 ● 身近な里山として住宅地跡地の緑化 		<ul style="list-style-type: none"> ● 身近に動物がみられる環境 ● バランスのとれた生態系 ● 一部の里山は残り、残りは自然にまかせる 		<ul style="list-style-type: none"> ● 環境教育を受けた子どもたちが里山を整備
保安林・海岸林	<ul style="list-style-type: none"> ● 都市の中の緑として大事にする 	<ul style="list-style-type: none"> ● 松に代わる植林 ● 学習林として活用 	<ul style="list-style-type: none"> ● エリア別の調査と短期的対応 	<ul style="list-style-type: none"> ● 幅100mの白砂青松 	<ul style="list-style-type: none"> ● 人々が遊ぶ保安林 	
市街地		<ul style="list-style-type: none"> ● 学校のグラウンドの芝生化 ● 壁面緑化・屋上緑化 ● 公共施設の緑化 ● 大規模緑地の創出 ● 風道をつくり市街地の気温低下 ● 鳥屋野潟などの水辺とつながった広範囲に及ぶ生態系ネットワークの創出 ● 草の生える資材を使った道路・駐車場 ● 街路樹を増やす 	<ul style="list-style-type: none"> ● 緑を増やす（町ぐるみで取り組む） ● 市街地の人を増やせば緑も増える ● 緑化の義務を強化 	<ul style="list-style-type: none"> ● 電線地中化 	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域毎に特色のある緑を増やす ● 空き地や児童公園を森にする ● 堀の復元 	

【生物多様性保全の短期目標と長期の将来像（2/2）】

項目	短期の目標（10年後）			長期の将来像（50年後）		
	保全	活用	仕組み	保全	活用	仕組み
市街地		<ul style="list-style-type: none"> ● 駐車場を空き地（遊び場）にする ● 交通網の整備（車を減らす） 				
保全活動一般		<ul style="list-style-type: none"> ● 子どもたちの環境学習 	<ul style="list-style-type: none"> ● 市民の意識・理解を高め活動の場を広げる ● 市民が議論する場をつくり、継続させる ● 市の情報公開 			<ul style="list-style-type: none"> ● 生物多様性の定量化・定量化 ● 保全活動の基準づくり ● 市民レベルでの普及

【50年後の担い手となる子どもたちにも分かりやすい将来像（1/2）】

項目	各班の意見	50年後の将来像のまとめ
里潟	<ul style="list-style-type: none"> ● 潟のまわりの木にカブトムシ、クワガタ、チョウがいる ● 潟で魚、カメなどたくさん生物とふれあえる ● 昔の姿と生物相 ● ヤナギやハンノキなどを豊富にし、自然を今以上によくなる ● 湧水の確保できる森（雑木林）も復活した潟 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 豊かな生物 ○ 水源の雑木林 ○
	<ul style="list-style-type: none"> ● 子どもたちが昔泳いだ潟のように水に入れる潟にする ● 子どもたちが素足で水辺を楽しめる。自然環境を創造していく（湖沼＋公園） ● 生き物観察など全国の小学生たちが競って見に来るような魅力的な生態系を持っている潟 ● 親水機能を向上させる。泥田を復活する。体験教育の場 ● 泥田・谷地・遊歩道 ● 防災安全性の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちが水に入れる ○ 環境学習 ○ 親水機能の向上
	<ul style="list-style-type: none"> ● 人の手が継続的に入る潟＝アシ原を田んぼもどきにする→小魚が育つ→水鳥が戻ってくる（ex. ラムサール湿地で唯一人の手が入っている） ● 鳥屋野潟の植生復活のための研究施設（学芸員を置いた）を設けると共に全国、世界の経験、研究に学んで、潟の植生復活を図る ● 自然博物館を作る（情報共有のためのもの（掲示品の自由さ）） 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人の手を掛けて保全 ○ 研究施設の設立（自然博物館）
河川	<ul style="list-style-type: none"> ● 三潟をつなぐ緑道、緑地帯、遊歩道→鳥が棲める「みどりの回廊」 ● 川と田と森と全部つなげるべき（水と緑ネットワーク） ● 排水路をつなげてゆけば魚が上ってゆく ● 主要な生物のつながる水路などを確保する 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 三潟をつなぐ緑地帯（みどりの回廊） ○ 水と緑のネットワーク
田園	<ul style="list-style-type: none"> ● 常に田んぼに水を張る ● 休耕地をなくす→人の手を加えた土地にする ● 「耕作放棄地」などと言わないで「水田ビオトープ」として行政が買い上げ管理する ● 生態系を考えた取り組み（植物相⇔昆虫相） ● 健全な生態ピラミッドができて田んぼや湖沼を維持していく 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 疑似湿地 ○ 水田ビオトープ ○ 生物豊かな水田 ○
	<ul style="list-style-type: none"> ● 自然に学ぶ→生物多様性を実現する手法を学ぶ ● みんなが楽しく関わりながら、自然の豊かな農地を維持する ● グリーンツーリズムで草とり体験、他の泥んこ遊びなど。地産地消、手間の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ○ グリーンツーリズム等、人の関わりで保全

【50年後の担い手となる子どもたちにも分かりやすい将来像（2/2）】

項目	各班の意見	50年後の将来像のまとめ
田園	<ul style="list-style-type: none"> ● 理想は、大規模農家で生態系も保てる農業経営が理想 ● “エコ”（無農薬。生物が住める田など）を付加価値にした米づくり ● 昭和30年代後半くらいの農業のやり方にもどせないか ● 日本一の田園風景水田を生物豊かな安全安心な米生産地の見本に 	○ ブランド米
	<ul style="list-style-type: none"> ● 生産の場以外の機能を持たせることで田園を保全する（農村景観、国土保全（洪水調整）、生き物の棲み家など） ● 大平野（＝田園）は大産地に特化させるゾーンと保存できるゾーンを確保 	○ 生産以外の機能で田園を保全 ○ 生産と保全のゾーニング
	<ul style="list-style-type: none"> ● 農業と生物多様性をどうすりあわせていけるか ● 産官学が一緒になって生物多様性を確立する 	○ 農業と生物多様性確保の両立に向けた体制の確立
里山	<ul style="list-style-type: none"> ● 最小限の開発、半栽培の林（粗放管理） ● 林業が衰退して管理できない里山があるはずである。自然遷移を助けるような管理が必要では？ 	○ 人の手が入る里山 ○ エネルギー源としての里山 ○ 環境教育
	<ul style="list-style-type: none"> ● 間伐材のペレットなどで燃料化 ● 再生可能エネルギーの対象としての里山整備。エネルギーの地産地消 	
海岸・保安心林	<ul style="list-style-type: none"> ● 森の手入れに人が入る多様な成果を学習する里山 ● 今環境教育を受けた子どもたちが森林の整備に関わる 	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 緑豊かな（在来種をベースに）林と農地と田園 ● 地元の人々との関わり合い（林の管理）、子どもたちも林で遊び学ぶ ● 野鳥もいっぱいやってくる樹種の多様な林 	○ 自生種ベースの林と農園 ○ 野鳥飛来する多種多様な林 ○ 子どもたちが遊べる林
市街地	<ul style="list-style-type: none"> ● 新潟市の市街地緑化率を政令市のトップクラスに（公園・住宅地・工場緑化を推進する） ● 細々でもよいから多様な生き物が棲める多様な環境を残していく。モリアオガエル、カブトムシ ● 市街地は人口が維持できるように公園は子どもが遊べる（外遊び）ようにする。子どもは生き物が好き。鳥や虫がいる公園。子どもが枝を折り自由に遊べる森公園。市街地に公園スケールでない大きな森をつくる。自由な活動のできる大きなヒマワリ畑の公園など 	○ 緑化率の高い街 ○ 多様な街中の生物環境 ○ 虫も動物もいる大きな森のある公園 ○ 子どもたちが自由に外遊びのできる公園
その他	<ul style="list-style-type: none"> ● 本当の生物多様性の理解を目指す ● 表明的な生物多様性はダメ!! ● 知恵をしぼる ● 市民の意識レベルを上げる ● 生物多様性への理解を深める（一般の人々が） ● 環境に対する市民の関心をたえず向上させていくような、継続的な保存・保護活動、教育が必要 ● 子どもたちが生物に興味をもてる ● 母親が興味をもつ ● 読み書き、ソロバンと同じレベルで「環境理解」を必須項目として義務教育に組み込む ● 長期休み中に子どもたちに「自然体験」学習をやる ● 人の手が入る＝さまざまな果実があること ● モザイク的な土地利用が維持できるよう人が残れることが重要 ● RDBのレベルを全て下げCR（絶滅危惧IA類）をなくす ● 強固な組織には若者を入れてほしい ● 専門家を増やす 	○ 市民の関心を高める継続的な取り組み ○ 環境教育 ○ RDBのレベルを下げCR（絶滅危惧IA類）をなくす ○ 若者も入れた組織づくりが必要 ○ 専門家を増やす